第28回新人シナリオコンクール応募作品

スイッチ

山田　明

登場人物表

藤村喜美子（34）……看護師
国枝重雄（55）……弁護士
藤村富子（66）……喜美子の母
川原なつみ（33）……被害者・喜美子を告発
川原祐介（35）……なつみの夫
川原大地（3）……川原家長男
有村有紀（28）……被害者
有村透（32）……有紀の夫
堀江郁子（30）……被害者
菅原晴美（27）……被害者
菅原直志（30）……晴美の夫
菅原康介（3）……晴美の長男
成田めぐみ（24）……被害者
成田隼人（3）……めぐみの長男
悠木瑠璃子（28）……被害者
悠木哲也（35）……瑠璃子の夫
悠木奈々（1）……悠木家長女
上杉康夫（42）……刑事
記者たち

梗概

藤村喜美子は、自分が勤める産科医院において、産まれてきた子どもを意図的にすり替えるという犯罪行為で逮捕された。

その瞬間の隠しカメラの映像が公開され、世間は大騒ぎになった。

弁護士の国枝重雄は、自ら立候補して喜美子の担当弁護人となった。生来の目立ちたがりの性格とともに、自分の宣伝にもなると考えたからだ。

警察の取り調べに対し黙秘を貫いていた喜美子は、国枝にはすべてを話し始めた。

「面白かったから」

喜美子はそう説明した。

あまりにも楽しそうに語る喜美子に、国枝は強い違和感を抱き始める。

おかしいのは喜美子だけではなかった。

喜美子の母、富子もどこか変だ。被害者たちの中にもおかしなのがいる。

自分の子がすり替えられていたと喜々とし

て、それを発表した悠木瑠璃子。
喜美子を告発した川原なつみも変だ。喜美子に対する意地だけで、好きになれない、自分の本来の子でない長男とこのまま生活をしていくと世間に発表した。
国枝は疲弊していく。反省の色が見えない喜美子に代わって、母親の富子に記者会見を開かせ謝罪させた。
弁護人でありながらも、国枝は喜美子に一撃を与えたくなっていたのだ。
喜美子は、母を追い込んだ国枝に対し怒りを爆発させ精神を病んだ。
裁判が終わり、喜美子は措置入院の処分を受けた。
国枝は富子とともに病院に喜美子を見舞う。
まだ事件の真の解決には時間がかかる。
気長に取り組んでいこう。
そう考えながら、国枝は病院を後にした。

了

○やや不鮮明な監視カメラの映像

薄暗い、産婦人科の新生児室。

何人かの新生児が眠っている。

そこにやってくる一人の女性看護師。

女は、迷うことなく一つのベッドに近づく。そして、慣れた手つきで、赤ん坊の足首に巻いてあるプラスチックのタグをスルリと足先を通してはずす。

同じことを二つ離れたベッドにいる赤ん坊にもする。

女にあわてた様子はない。

ポケットから布を取り出す。そして、それぞれの赤ん坊の足の裏に書いてある名前を丁寧に拭きとる。

次にマジックを取り出す。

そのマジックで、その二人の新生児の足の裏に、新たに何か書き込む。

女は、片方の赤ん坊を持ち上げると、空いたベッドの中にいったん寝かせる。そして、もう片方の赤ん坊を、いま空いた

ばかりのベッドに入れる。
そして、いったん別のベッドに移した赤ん坊を、今あけたばかりの空のベッドにおさめる。
女性看護師、それぞれの赤ん坊の産着や毛布などを整え、そしてあたりを見回した後、監視カメラに視線を送る。
カメラを通し、女はこちらを見ているかのよう。
男の声「なんでこんなことしたの？」

○警察署・取調室・中
中央の机にノートパソコン。
その一方に刑事の上杉康夫（42）が座っている。
上杉「ねえ、なんでこんなことしたの？」
上杉の正面には、監視カメラに映っていた藤村喜美子（34）がいる。喜美子は、髪を後ろで無造作に束ね、うつろなぼんやりとした表情。

上杉「黙ってないで、なんとか言えよ」
喜美子「……」

○警察署・前
　マスコミや野次馬でごった返し、騒然とした雰囲気。
　女性リポーターが、興奮した口調でテレビカメラに向かっている。
女性リポーター「現在、藤村喜美子容疑者の取り調べが進んでいる模様です。藤村容疑者が何を語るのか？　事件の全容の解明が待たれます！」

○取調室・中
上杉「いつまでそうしている気？　こうして映像という立派な証拠がちゃんとあるんだから。言い逃れなんてできないんだよ」
喜美子「……」
　上杉、大げさにため息。

○喜美子の実家がある団地
似た外観の棟がいくつも並ぶマンモス団地。大勢の野次馬とマスコミ、そしてそれを整理する警官らがいる。

○喜美子の家・中
六畳の和室。
座卓の一方に弁護士の国枝重雄（55）が座っている。体格はいかついが、その表情にはどこか愛嬌がある。
その向かいに喜美子の母の富子（66）がうなだれた表情で座っている。
国枝「まあ、元気だしなさいよ。私がなんとかするから」
と朗らかに言う。
富子「はい……」
と恐れ入ったように深く頭を下げる。

○警察署・取調室・中
ドン！　と上杉がテーブルを叩く。

上杉「いい加減にしろ！　よく聞け。お前がやったことはわかってんだ！　問題は、お前が今までこれを何回やったかってことなんだよ！」

喜美子「……」

上杉「これが初めてじゃない。そうだろ？」

喜美子、うつろな呆けたような表情。

上杉「そんな演技したってダメだ。こっちは全部わかってんだ。昨日までアンタ、ちゃんと普通に仕事してたじゃねえか」

喜美子「……」

表情を変えない喜美子。

上杉、イラついたように、再びテーブルをドンと叩く。

○喜美子の実家・和室

国枝、余裕のある表情で、

国枝「任しといて。オレ、こう見えても腕のいい弁護士だから」

○警察署・接見室・中

警官がドアを開け、喜美子を接見室に入れる。

アクリル板の反対側にいるのは国枝。

国枝「どーも、弁護士の国枝です。さあ、そこに座って」

喜美子、無表情のまま椅子に座る。視線を下に。国枝を見ようともしない。

警官が出ていく。

国枝「（笑顔）どうも。あらためまして、弁護士の国枝重雄です。あんたの弁護を担当させてもらいます」

喜美子「……」

国枝「言っとくけど、オレ、あんたのお母さんから依頼を受けたんだ」

喜美子、驚いたように国枝を見る。

喜美子「お母さんが？」

国枝「（笑って）おっ声が聞けた。あんた、取り調べに完全黙秘を貫いてるんだって？」

喜美子「……お母さん、どうしてます？」

国枝「元気だよ。まぁ、今回の件で、だいぶ
参っちゃってるみたいだけど」
喜美子「……」
国枝「表にはマスコミ連中がウヨウヨいる。
でも、買い物なんかは、ウチのスタッフが
買って届けてるから心配いらない。当分は
表に出なくても大丈夫だろう」
喜美子、かすかに笑顔。
喜美子「ありがとうございます」
国枝「いいか、オレはあんたの味方だ。あん
たの不利になるようなことは絶対にしない。
安心してなんでも話してくれ」
喜美子、身を硬くする。
国枝、そんな様子を見て、
国枝「あんた、オレのこと知ってるだろ？」
と自分の顔を指さす。
喜美子、小さく首をかしげる。
国枝「（おどけて）あれ、知らない？　おかし
いな。これでも有名人のつもりなんだけど」
と愛嬌のある笑顔を見せる。

国枝「この前あった教祖様の裁判知らない？
ホラ、宇宙のエネルギーがどうのこうのってやつ。あれの主任弁護人がオレ」
喜美子、まじまじと国枝を見つめる。かすかに見覚えがある様子。
国枝、満足そうにうなずき、
国枝「教祖様は無罪になった。いいか、実際はどうだったかなんて関係ない。裁判の結果が真実なんだ」
喜美子「……」
国枝「あんたの逮捕事由は偽計業務妨害。今回の件は、意外と難しいんだよ。子どもを誘拐したわけでもなければ傷つけたわけでもない。ただすり替えただけだ」
喜美子「……」
国枝「偽計業務妨害なんてのは、三年以下の懲役、または50万円以下の罰金。つまりたいした罪じゃない。普通は執行猶予だ」
喜美子、国枝が味方かどうか見極めるかのようにじっと見つめる。

国枝「オレね、けっこう目立ちたがりなのよ。
話題性のある事件を扱ってテレビに出たり
するのが好きなの」
と愛嬌のある笑顔を見せる。
クスリと微笑む喜美子。
国枝「どうよ？　こんな弁護士のほうが、か
えって信用できるってもんだろ。青臭いこ
となんか言わねえ。あんたの罪を少しでも
軽くすることがオレの正義だ」
喜美子、笑顔で国枝を見る。国枝を信用
した様子。
国枝「よし決まりだ。そんで、早くこんなト
コを出て、お母さんを安心させてやろう」
喜美子「ハイ！」
と力強くうなずく。

○警察署・接見室・前
国枝が出てくる。
そこに上杉がいて、
上杉「どうでした？」

国枝、笑顔で相手にせず、その脇を通り過ぎる。

上杉「藤村喜美子は何か話しましたか？」

国枝、立ち止まり振り返る。

国枝「おい、カンベンしてくれよ。接見室での内容を警察に教えるバカな弁護士がどこにいるよ？」

上杉「つまり話をしたんですね？」

国枝「あとで弁護人選任届を提出する。そんでまたすぐ来るから」

上杉「取り調べがあるんだけど」

国枝「そんなの知るか。接見はこちらの権利だからな。何時間でも好きなだけこもってやるよ」

と歩きだす。

上杉は悔しそうな表情。

○警察署・外

国枝が出てきて、大量のマスコミに揉みくちゃにされる。が、国枝は注目される

のが嬉しそう。

記者A「国枝さん、藤村喜美子と何を話しましたか？」

国枝「（笑顔）まあ、雑談だよ」

記者B「藤村喜美子は、犯行について何か語りましたか？」

国枝「それについてはお答えできません」

記者C「つまり話したんですね？　なんと言ってましたか？」

国枝「（笑って）だから、それについてはお答えできません！」

記者B「では、雑談というのは、どのような内容ですか？」

国枝「うんまあ、暑いだの寒いだの、そんなことだよ」

押し寄せてくるマスコミ。

けれど、国枝は嬉しそうに対応している。

○警察署・接見室・中

喜美子と国枝がアクリル板をはさんで向

かいあって座る。
喜美子、嬉しそうに笑っている。
喜美子「じゃあ、家の周りにはもうマスコミの人たちはいないんですね？」
国枝「ああ。あの手の連中は人権って言葉に弱いんだ。人権侵害の申し立てをするって通告したら、すぐに撤収していったよ」
喜美子「よかった」
笑顔の喜美子。
国枝は、そんな喜美子をしばらく見つめ、
国枝「さぁ、始めようか。弁護をする以上はすべてを知っておきたい。何があった？あんたは何をしたんだ？」
喜美子、表情を硬くする。
国枝「オレを信用しろ。いいか、弁護士ってのは依頼人を不利にするような真似は絶対にしないんだ。裁判になって、起訴内容以上の何かを、オレが知っていたとしても、それは絶対に誰にも話さない。起訴された内容の中であんたを全力で弁護するだけだ。

でもな、もし公判の中で、オレの知らない事実が出てきたら、それはマズいんだ。あんたを弁護できなくなる」

喜美子「何を……何を話せばいいんですか？」

国枝「全部だ。あんたのやったこと全部。いいか、あんたは5月22日の深夜、川原祐介、なつみ夫婦の子どもを、武田翔太、千秋夫婦の子どもとすり替えた。この事実に間違いはないな？」

喜美子、コクリとうなずく。

国枝「なぜ、そんなことをした？」

喜美子「……」

国枝「よし、質問を変えよう。世間は今、大騒ぎだ。なぜなら公開された映像のあんたは、ものすごく手慣れていたから。つまり、他にもすり替えられた子がいるんじゃないかって噂になっているんだ。どうだ、他にもあんたはやっているのか？」

喜美子「……」

国枝「俺はあんたの味方だ。裁判に備えて、

俺はすべてを知っておかなきゃならんのだ」
考え込む喜美子。次第に表情が緩み、意味ありげに国枝を見て微笑む。
国枝は、そんな喜美子の表情の変化を観察し、
国枝「さぁ話してくれ。他にも子どもをすり替えをやったんだな？」
喜美子、コクリとうなずく。
国枝「何回くらいやった？」
喜美子「７回……かな？」
国枝「今まで、７回産まれてきた子どもをすり替えたんだな？」
うなずく喜美子。
国枝「どうしてそういうことをした？」
喜美子、首をかしげ無言。だが、わずかに微笑んでいるように見える。
国枝「面白かったからか？」
喜美子、ハッキリと笑顔を浮かべ国枝を見る。だが、何も言わない。
国枝「よし、動機はいい。とにかく話を聞か

せてもらおう。最初からだ。初めてやったのはいつだ？」

喜美子「……全部話すんですか？」

国枝「そうだ。大丈夫、時間ならたっぷりある。弁護士の接見てのはすべてに優先されるんだ。だからヤクザの連中なんて、この接見を使ってやりたい放題だよ。証拠の隠滅から証言の打ち合わせまで、なんだってできるんだ」

喜美子、クスクスと笑い出す。

国枝「さぁ始めよう。初めてやったのはいつだ？」

喜美子「８年前……だったかな？」

国枝「よし、じゃあその時のことから聞こう。ゆっくりでいいぞ。時間はたっぷりある」

○栗原マタニティクリニック・前（回想）

Ｔ「八年前」

住宅街にある三階建ての産婦人科医院。

派手な軽自動車がやってきて、医院の前

にある駐車場に停まる。

○同・運転席（回想）

有村有紀（28）が膨らんだお腹を抱えて煙草を吸っている。

○クリニック・待合室・中（回想）

有紀がいる。

そこに看護師姿の喜美子（当時27）が来る。

喜美子「有村さん、どうぞ」

有紀、ニッコリ笑って立ち上がり、

有紀「喜美子、久しぶり」

喜美子「（苦笑）久しぶりじゃありませんよ、有村さん。母親学級も、定期健診も受けてないですよね？」

有紀「まあ、ちょっと忙しかったのよ。おまけして、昔のよしみでさ」

喜美子「そういう問題じゃないと思うけど」

と言いながら鼻をひくつかせ、

喜美子「有村さん、煙草吸った？（更に匂いを嗅ぎ）ひょっとしてお酒も？」
有紀「（笑って）ちょっと喜美子さ、鼻良すぎじゃない？　飲んだのは、昨日だって」
喜美子「妊娠中のお酒と煙草はよくありませんよ」
有紀「それもまけといて。友達でしょう？」
と診察室に向かう。
その後姿を見る喜美子。
喜美子の声「有村有紀は、中学の時のクラスメイトでした。もちろん友達なんかじゃありません」

○診察室・中（回想）
医師、栗原洋平（44）がいる。
診察を終え、服装を整える有紀。
その背後に喜美子。
栗原「まあ、今のところは順調ですな。だが酒と煙草は控えた方がいい。特に煙草はいかん。いいですね？」

有紀「はい……すみません」
と言ってから喜美子を睨む。
喜美子、困惑の表情。
栗原「母親学級も参加してないようだし、有村さん、あなた、母親になる自覚、ちゃんと持ってます？」

○クリニック・入口・外（回想）
不機嫌な表情で出てくる有紀。
その後に続く喜美子。
有紀「ねえ、なんでいちいち先生にチクるわけ？」
喜美子「（困惑）ええ？　あたし、なんにも先生に言ってないけど」
有紀「じゃあ、なんで先生が、いろいろ知ってるのよ？」
喜美子「だって匂いがするし、母親学級も、ちゃんと名簿があるから、それで――」
考え込む有紀。
有紀「うん、なるほど。わかった。じゃあ、

今回はそういうことにしておこう」
喜美子「……」
有紀「ねえ今日これから、仕事終わったら、
飲みに行かない？」
キョトンとする喜美子。
喜美子「だって……先生から、お酒は駄目
だって」
有紀「大丈夫よ。考えてみれば、喜美子とは
付き合い長いけど、一緒に遊んだことって
無いじゃん。ねえ、飲みに行こうよ」
喜美子「いや駄目だよ。妊娠中は、そういう
のは駄目だと思う」
有紀、呆れた顔になり、
有紀「なんか、つまんない女ね、あんたって。
そんなんで生きてて楽しい？」
喜美子「ごめん。でも、きっと旦那さんも心
配するから。すごく優しそうな人だった
じゃない」
有紀「(笑って) 大丈夫。あたしの夜遊びは旦
那公認だから。それにさ――」

と喜美子の耳に小声で、
有紀「遊ぶ男の血液型はちゃんとチェックしてるから」
喜美子「えっ？　それって……？」
有紀「（笑って）わかってるでしょう？　（真顔になり）これ秘密だからね。二人だけの秘密。いい？　絶対よ」
喜美子「うん……わかった。大丈夫。産婦人科にいると、いろいろあるの知ってるし」
有紀、興味津々の顔つきに変り、
有紀「えっ、それなに？　どういうこと？　やっぱり不倫相手の子供妊娠しちゃったとかあるの？」
喜美子「あるっていうか、私たちは、そういうのには立ち入らないようにしてるから。もし、何か気付くことがあったとしても、それは私たちの仕事じゃないし」
有紀「てことはやっぱりあるんでしょう？　誰誰？　あの人そうじゃない？　ほら、なんて言ったっけ？　前、あたしと健診が一

緒だった人。ええっと、ほら堀江さんて人。
あの人そうでしょう？」
喜美子「（苦笑）さあ？」
有紀「絶対そうだって！　あたし見ちゃったもん。スマホで血液型のサイトみたいなのチェックしてるの。血液型っていったって占いとかじゃないよ。両親が何型と何型の場合、何型の子供が産まれるみたいなさ。絶対、不倫相手の子供を妊娠してるよね？」
喜美子「どうかなあ？　あたしは気付かなかったけど。とにかく看護師という職業上、他の患者さんの話をむやみにすることはできないの。ごめんね」
有紀、大げさにため息を吐く。
有紀「ホント、あんたってつまんない女。まあいいや。じゃあ、今日は大人しく帰るとするか」
と車に乗り込み、窓から顔を出す。
有紀「あとさあ、これからは有紀って呼んでよ。付き合い長いんだしさ」

喜美子「うん、わかった」
車が出ていく。
喜美子、それを無表情に見送る。
喜美子の声「堀江郁子さんのことは、あたしも気が付いていました」

○同・待合室・中（回想）
堀江郁子（30）が暗い表情で、待合室のソファに座っている。
そこに来る喜美子。
喜美子「堀江さん、どうぞ」
郁子「……はい」
と立ちあがる。
喜美子の声「産まれてくる赤ちゃんの父親に自信が持てない母親って、実はとても多いんです」
郁子、暗い表情で待合室を出る。
喜美子「（ニッコリ）どうしました？　何か心配なことでもあります？」
郁子「いえ……別に」

と診察室に向かう。
その後姿を見る喜美子。かすかに残酷な笑顔が浮かんでいる。

○同・診察室・外・廊下（日替わり）（回想）
不機嫌に歩く有紀。
その後ろに続く喜美子。
有紀「（大きく）もう、なんなのよ、うるさいなあ。放っといてよ！」
喜美子「だって有紀が――」
有紀「なに下の名前で呼んでんのよ。あたしお客さんでしょう？　失礼過ぎない？」
喜美子「すいません」
そこに別の看護師、木戸和江（38）がやってくる。
和江「どうしました？（喜美子に）どうしたの藤村さん？」
喜美子「はあ……あの」
有紀「（大きく）この看護婦、うるさすぎるんですけど！　あたし、ちゃんとやってるの

に、なんだかんだと、偉そうに説教してきて。ああ感じワル。なんか、あんまりあれこれ言われたら、かえって胎教に良くないような気がするんですけどぉ！」

和江「はい、申し訳ありません」

と頭を下げる。そして、喜美子に、

和江「（小声で）藤村さんも」

喜美子も深く頭を下げ、

喜美子「申し訳ありませんでした」

有紀「頭きたからロコミにここのこと書いとくからね。ロうるさい看護婦がいるって」

と待合室に入っていく。

和江「（喜美子に）まあ、ああいう人はしょうがないよ。これからは少し対応に気を付けましょう」

喜美子「すいませんでした」

○待合室・中（回想）

不愉快そうな顔の有紀、そこに郁子がいることに気が付く。

有紀「あなた……堀江さんじゃなかったっけ、
たしか？」
郁子「……はい」
有紀「気を付けた方がいいよ。ここの看護婦、
あなたのこと、よく噂してるから。とくに
あの若い方」
と待合室の外にいる喜美子を見る。
喜美子と和江が、こちらを見て何やら話
をしているのが見える。
有紀「ほんと失礼しちゃう。冗談じゃないよ。
かげで何言われてるかわかったもんじゃな
い。あんたも変な噂流されないように、気
を付けた方がいいよ。ていうか多分流され
てるよ。あたし聞いたことあるもん」
郁子「あの……噂って、どういう？」
有紀「さあ？　でも気にしない方がいいよ。
お腹の赤ちゃんに罪は無いんだしさ」
郁子の顔がこわばる。
有紀、待合室を出る。その表情に残酷な
笑顔が浮かんでいる。

郁子、待合室の中から、喜美子の様子を窺う。
喜美子は、和江と話しながら、時折笑顔を浮かべ、郁子の方をちらりと見る。
×　×　×　×
喜美子が来て、待合室の扉を開ける。
喜美子「堀江さん、どうぞ」
郁子「（暗く）はい」
と立ち上がり、ゆっくり歩く。
喜美子「どうしました？　何か気になることでもあります？」
郁子「いえ」
喜美子「（笑顔）大丈夫かなあ。何か心配なことでもあるんですか？」
郁子、キッとした表情で喜美子を見る。
郁子「失礼なこと言わないでください！　何なんですかあなたは！」
喜美子「いえ……あの、あたしは別に何も……」
郁子「何なんですか、この病院は！　患者の

ことをバカにしてるんですか！」
喜美子「いえ、そんなことは」
郁子「かげで人のことを笑ってるんでしょう？　患者のことをネタにして、かげで酷いことを言ってるんですってね！」
喜美子「そ、そんなことありません！」
　そこに和江と栗原医師が来る。
栗原「どうしました？」
郁子「私、この看護婦さんに侮辱されました！　酷い侮辱です。この人は、かげで人の悪口を言ってるんです！」
喜美子「わたし、そんなことしません」
　栗原、喜美子を押えて、
栗原「（郁子に）まあまあ、落ち着いて。落ち着いて話をしましょう。さあどうぞ、こちらへ」
　と郁子を促し、診察室へ。
郁子「本当です！　あたし、さっき聞いたんです！　この看護婦が、あたしのひどい噂を立ててるって！」

喜美子、反射的に待合室を見て、悔しそうな表情を浮かべる。

栗原「（喜美子に）本当かね？」

喜美子「いえ、違います」

郁子「本当です！　私、聞いたんです。　この女が、私の酷い噂を立ててるって。私この病院で子供を産みたくありません！」

栗原「まあ、とにかく落ち着いて。私が話を聞きますから。（喜美子に）藤村くんは、ちょっとはずして」

喜美子「はい」

と頭を深く下げる。

○同・休憩室・中（回想）

喜美子と和江が、お茶を飲んでいる。二人の前には、せんべいなどのお菓子。

和江「やれやれ。とんだ災難だったわね」

喜美子「すいません」

和江「まあ、とりあえず堀江さんも落ち着いたみたいだし、一件落着じゃない。実際、

今の時期に、病院替えるなんて得策じゃないのは、堀江さんもわかってるだろうし」
喜美子「……そうですよね」
和江「(笑って)まあ、気にしなさんな。ああいうのは、黙って頭下げときゃあいいのよ」
喜美子「はい」
和江「気にしない、気にしない」
とほがらかに笑う。
黙り込む喜美子。だが、徐々に妖しい笑顔が広がっていく。
喜美子の声「二人の出産予定日は同じ日でした。そして、その時私は、そのイタズラを思いついたのです」
せんべいを手に取る喜美子。バリバリとせんべいをかじりながら笑う。

○分娩室・中(回想)
慌ただしい室内。
ベッドの上には有紀。
隣に夫の有村透(32)が付き添っている。

いきんで子供を出産。
響き渡る赤ん坊の泣き声。
喜美子と和江が、手早く産まれた赤ん坊を拭き、子供の足首と有紀の手首に同じプラスチックのタグをつける。
そして、有紀に赤ん坊を抱かせる。
喜美子の声「予定通り、二人は同じ日に出産しました。二人とも男の子。特に身体的に目立つ特徴とかもありませんでした」
×　×　×　×
ベッドの上には郁子。
出産、赤ん坊の泣き声。
喜美子と和江らが手早く有紀のときと同じ処置を施す。
喜美子の声「神様の許可が出たんだと思いました。だって二人とも、本当に見分けがつかないくらいそっくりだったんです」
○看護師室（深夜）（回想）
モニター画面に、薄暗い新生児室の様子

が映っている。
特に問題もなく、新生児たちはぐっすりと眠っている。
壁の時計は、深夜の十二時。喜美子と若い看護師、伊藤美優（23）がいる。
喜美子「伊藤さん、仮眠とってきなよ。なんか、あたし全然眠くならないんだよね」
美優「そうですか。じゃあ、お先に休ませてもらいます」
とあくびをしながら立ち上がる。
喜美子「ごゆっくり」
と笑顔で見送る。
が、すぐに真顔になり、モニター画面の新生児室を確認。
新生児は静かに眠っている。

○新生児室・外（回想）
薄暗い廊下を歩く喜美子。

○同・中（回想）

薄暗い室内。
10のベッドのうち8つが埋まっている。
喜美子が入ってくる。
一人の赤ん坊がむずがる。喜美子は、その声に、跳び上がるほど驚く。
並んだ二つのベッドに「ありむら」「ほりえ」の札が下がっている。
喜美子、何度もあたりの様子を窺う。
赤ん坊の足首にプラスチックのタグがついていて、それぞれに「ありむら」「ほりえ」と書いてある。
喜美子の手が猛烈に震えている。
その手で、なんとかタグを足首から抜き取る。
そして、それを入れ替え、それぞれの足首につける。
汗が噴き出す。拭う。
喜美子、ポケットからコットンを取り出し、足の裏に書いてある名前を消し、それぞれの名前に書き換える。

「ありむら」の赤ん坊をそっと持ち上げ、空いたベッドの中に。そして「ほりえ」の赤ん坊を「ありむら」の中に。最後に、空いたベッドの中の赤ん坊を「ほりえ」の中に収める。

息遣いが荒い。

喜美子、不備がないかを確認するようにキョロキョロと見回したのち新生児室から出ていく。

○看護師室・中（回想）

喜美子が駆け込んでくる。

冷蔵庫を開け、ペットボトルのミネラルウォーターを一気飲みする。口元から水がこぼれるが拭おうともしない。

そして、あたりを見回し深呼吸をする。

○元の接見室・中

息を飲み話を聞く国枝。

対して喜美子は楽しそうである。

喜美子「プラスチックのタグは、ハサミで切らなければはずせないことになってます。でも、少し緩くとめただけで、柔らかい赤ちゃんの足首からは簡単に抜けることをあたしは知ってました」

国枝「……」

○栗原マタニティクリニック・診察室（回想）

有紀と赤ん坊が、栗原から診察を受けている。

栗原「（ニッコリ）はい、母子共に健康！　問題なし！」

離れた所で見ている喜美子、うっすらと笑顔を浮かべる。

×　×　×　×

郁子と赤ん坊が診察を受けている。

栗原「（ニッコリ）はい、母子共に健康！　問題なし！」

笑顔を浮かべる喜美子。

喜美子の声「でも、しばらくの間は不安でし

た。だからあたしは二人の様子を見に行くことにしたんです」

○住宅街（回想）

喜美子が帽子をかぶりサングラスをかけ歩いている。手にメモを持ち、辺りをキョロキョロと見回す。

○有村家のあるマンション・前（回想）

喜美子がやってきて、辺りを窺う。

「有村」の名が入った駐車場に車が無い。

そこに一台の車がやってくる。

慌てて身を隠す喜美子。

車は「有村」のスペースに停まる。

降りてきたのは、有村透とまったく見知らぬ若い女。

喜美子、それを見て小さく噴き出す。

喜美子の声「あたし、それで有紀の実家に行ってみたんです」

○有紀の実家・前（回想）

住宅街にある二階建ての家。

喜美子が来て、そっと中を窺う。

中から赤ん坊の泣き声が聞こえてくる。

更に「ああもう！　うるさいな！」という有紀の声。

笑いながらその場を離れる喜美子。

喜美子の声「有紀は離婚していました。『あたしの夜遊びは旦那公認』とか言ってたくせに。あたしおかしくって。あの有紀が、子持ちのバツ一なんですよ。(笑って)しかも、全然関係ない、堀江郁子さんの子供を育ててるんです！」

○住宅街にある公園（回想）

サングラス姿の喜美子がいる。

郁子が、ベビーカーの中の赤ちゃんを笑顔であやしているのが見える。

○住宅街の道（回想）

サングラスをかけた喜美子が、大笑いをしながら走っている。
その異様な姿を見て、通りすがりの人々が怪訝な表情で喜美子を見る。

○元の接見室・中
喜美子の目がキラキラと輝いている。
喜美子「あたし、その時わかったんです。子供をすり替えても、そう簡単にばれることは無いって。だから、それからもときどき（ニコリと笑い）子供をすり替えるようになったんです」
国枝「なるほど。そりゃあスゴイ話だ」
と喜美子の顔を見る。
喜美子は、ニコニコと楽しそうに国枝を見ている。
国枝「……そりゃあスゴイ話だ」

○喜美子の部屋・中（夜）
六畳ほどの畳敷きの部屋。

家宅捜索の後らしく、物などが乱雑に床に散乱している。
国枝「ったく、警察ってのは。少しは片付けていけっつうの」
そこにやってくる富子。
国枝「お母さん、娘さんの卒業アルバムみたいな物はありませんかね？」
富子「さあ？　警察の人が持ってたんじゃありませんか？」
国枝「いや、押収物のリストの中に卒業アルバムはなかった。だから、どっかにあると思うんだが……」
富子、あまり気のない様子。
富子「はあ……卒業アルバムが、そんなに大切なんですか？」
国枝「わからん。でも、なんでも知っておきたいんだ。お嬢さんの人となりっていうの？　どんな子どもだったか。どんな育てられ方したのか？」
富子、わずかに不服そうな顔。

富子「……わたしはちゃんと育てましたよ」
国枝「（慌てて）いやいや、そういう意味じゃない。お母さんを責めてるわけじゃない」
と散らばったものをいろいろ手に取り眺める。
その中に風景を描いた水彩画がある。淡い色彩の、なかなかの腕前。
国枝「こりゃあたいしたもんだ。おじょうさんは、なかなか絵が上手だったようですな」
と絵を眺めながら言う。
返事がない。
見ると、富子はハッキリ嫌そうな顔をしている。
富子「絵なんかうまくたってねえ……」
国枝「……」
富子「そんなもん、いくらできても、なんにもなりゃあしない」
突き放したように言う富子。
国枝は、その冷たい言い方に驚く。

○国枝家・キッチン（夜）
暗い室内。
国枝が明かりを点け、キッチンテーブルに腰を下ろす。
テーブルの上に夕食の準備はない。
そこに妻の勝子（52）が来る。
勝子「あら、いたの？」
国枝「そりゃあいるよ。自分のうちだからな」
勝子、無言で出ていこうとする。
国枝「おいメシは？」
勝子「（振り返り）食べるの？」
国枝「そりゃあ……いや、いいや。別に食欲なんかねえし」
勝子、背を向け、キッチンを出る。その途中で、
勝子「また派手な事件に首突っ込んで」
と嫌そうに呟く。
国枝「（大声）おい、ちょっと待て！　今、なんつった？　おおい待てよ！」
勝子が戻ってくる気配はない。

国枝、ため息をつく。立ち上がり、冷蔵庫のドアを開け缶ビールを取り出す。

○同・居間（夜）

缶ビールを飲みながら国枝がくる。

キャビネットに飾ってある家族の写真。

現在よりも若い国枝と勝子、そして小学生の頃の娘の祐子の写真。

その隣には、大人になった裕子が赤ん坊を抱いて笑顔で写っている写真がある。

それらをじっと見る国枝。

国枝「（大声）おおい、裕子の子供の名前、なんていったっけな？」

どこからも返事がない。

国枝「なあ、勝子さんよ！　孫の名前、なんていったっけか？」

返事がない。

国枝「（舌打ち）返事くらいしろよ、バカ野郎！

それが夫に対する態度か！」

静まり返る家の中。

国枝「ちぇ、バカバカしい」
と呟き、ビールを飲み干す。

○警察署・接見室・中
アクリル板を挟んで国枝と喜美子が座っている。
国枝「さぁ、続きをやろうか」
喜美子、わずかに笑顔を浮かべている。
国枝「最初は、ちょっとした復讐心みたいのもあったのかもしれんが、とにかくあんたは赤ん坊をすり替え、それがそう簡単にバレないことを知った。で、あんたはそれからも、ときどき子どもをすり替えるようになったってわけだな？」
喜美子、小さくうなずき、
喜美子「でも、あんまりおもしろくなかった」
国枝「どういうことだ？」
喜美子「やっぱりバレるのが怖かったから、すごく慎重にやったんです。両親の血液型とか、なんとなく旦那さんか奥さんの顔と

か雰囲気とかが似てるとか。でも、慎重になりすぎたせいか……」

国枝「どうした？」

喜美子「思ったより、あんまり面白くならないんです。みんな普通に幸せそうで……」

○商店街（回想）

T「六年前」

喜美子の前に谷村隆夫（33）、香織（31）夫妻。香織の腕の中には未来（1）が気持ちよさそうに眠っている。

香織「なんかすっかりパパに似てきて」

と嬉しそうに言う。

喜美子、引きつった笑顔を浮かべながら、未来と隆夫を見比べる。

喜美子「ホ、ホント、そっくり」

○元の接見室・中

喜美子「ホントによく似てるんです。確かにすり替えたはずなのに」

国枝「……（苦笑）」
喜美子「なんか、それじゃあ面白くなくて。もっと、こう……ドキドキしたいっていうか……」
国枝「よくあることだ。感覚ってのは麻痺してくもんだ」
喜美子、嬉しそうに大きくうなずき、
喜美子「それで、思い切ってすり替える条件を厳しくしてみたんです」
国枝「どう厳しくしたんだ？」
喜美子「その後を眺めていて、面白くなりそうなとき。例えば、親の経済状況とか、子供に対する想いとかが違いすぎるときとか。なんか面白そうだと思いません？」

○栗原マタニティクリニック・待合室（回想）
T「六年前」
菅原晴美（27）と夫の直志（30）が、仲良く並んで座っている。
そこに喜美子が来て、

喜美子「菅原晴美さん、どうぞ」
晴美「はい」
と立ち上がる。そして直志に、
晴美「行ってくるね。それとも一緒に来る？」
直志「（苦笑）いや、僕はいいや。僕は、ここで待ってるから」
喜美子、晴美と並んで歩き、
喜美子「ほんといい旦那さんですね。いつも付添ってきてくれて」
晴美「まあ、時間が自由になる仕事ですからね。それに（とお腹をさすり）二人とも、ずっと子供が欲しかったし」
喜美子「素敵。なんか理想のご夫婦って感じ」
診察室の入口で、入れ違いに成田めぐみ（24）が出てくる。
めぐみは髪を茶色に染め、不機嫌そうな顔でスリッパをズルズルと引き摺るように歩く。
喜美子、チラリと振り返りめぐみの後姿を見る。

喜美子の声「成田めぐみさんと菅原晴美さんは、本当に正反対の二人でした」

○診察室・中（回想）

栗原医師の診察を受ける晴美。熱心に耳を傾けている。

喜美子の声「菅原さんの所はお金持ちで、子供を本当に楽しみにしていました。家族が増えるからって一戸建ての家を買ったりして、本当に裕福で素敵なご夫婦でした。それにひきかえ……」

○クリニック・外（回想）

だるそうに歩くめぐみが出てくる。出てきてすぐ煙草に火をつける。

喜美子の声「成田めぐみさんの方は、結婚するはずだった男の人は、いつのまにか連絡がとれなくなったらしくて。（笑って）逃げられちゃったそうです。でも、もう堕ろせない時期だったし。結局、産むことになっ

たんですけど。あたし、その二人の赤ちゃんをすり替えたんです」

○新生児室（深夜）（回想）

「なりた」のベッドにいる赤ん坊。あどけない瞳で喜美子を見ている。

喜美子、おどけたような声で、

喜美子「まあ、なんという、運命のいたずらなのでしょう」

と笑顔で赤ん坊の鼻を軽くつつく。

○元の接見室・中

喜美子、身を乗り出すように、

喜美子「国枝さんは、人が成長するにあたって遺伝と環境の、どちらが大切だと思いますか？」

国枝「（戸惑い）どっちって言われてもなあ、どっちも大切なんだろうけど、まあ、結局は環境なんじゃないかな？」

喜美子「ですよね？　あたしも、そう思って

ました。でも遺伝の影響はもの凄く大きいんです。少なくとも小さいうちは」

○成田めぐみの住むアパート・前（回想）

T「三年前」

木造、２階建てのアパート。

その前で、水たまりを海に見立て、お菓子の空き箱の船で成田隼人（３）が遊んでいる。

そこにやってくる喜美子。

隼人、気がついて、

隼人「こんにちは。お姉ちゃん」

喜美子「（笑顔）やーん、お姉ちゃんて呼んでくれるんだ」

隼人「（笑って）だって、この前、お姉ちゃんて呼んでって言ってたもん」

喜美子「すごい。隼人くん、お姉ちゃんのこと覚えててくれたんだ。すごいね、隼人くんて頭いいよね」

と言って隼人を抱きしめる。

喜美子「お母さんは？」
隼人「寝てる。だから僕は、ここで遊んでるんだ」
喜美子「何して遊んでるの？」
隼人「船で」
と単なる駄菓子の箱を見せる。
喜美子「ふーん、それが船か。すごいね、隼人くんは、想像力旺盛だね？」
「想像力旺盛」という表現がわからないのかキョトンとする隼人。
喜美子「隼人くん、お菓子食べる？」
とバッグから駄菓子を取り出す。
隼人「うん、ありがとう！」
と笑顔で答え、お菓子を受け取る。そして、とびきりの笑顔でお菓子を食べる。
喜美子の声「成田めぐみさんの子どもは素直なとてもいい子どもに成長していました。頭もいいし、可愛いし。あたしが、すり替えたりしなければ、間違いなく幸せな人生を歩んでいたはずです」

喜美子、隼人の髪を優しく撫でる。
不思議そうな目で喜美子を見る隼人。
喜美子、そっと隼人を抱き寄せ、
喜美子「隼人くん。隼人くんにはさ、本当のお父さんとお母さんがいるって知ってる？」
隼人「……」
喜美子「隼人くんの本当のお父さんとお母さんはお金持ちで優しくて、とってもいい人たちなんだよ」
隼人「……うそだ」
喜美子「本当。いつか本当のお父さんとお母さんに会えるといいね？」
と言って強く隼人を抱きしめる。
しかし、その顔は残酷に微笑んでいる。

○森林公園（回想）
緑の豊かな広い公園。
芝生の上にレジャーシートを広げ、菅原晴美、直志夫婦と、その子供、康介（３）がいる。

その様子を遠くから眺めている喜美子。
喜美子の声「菅原さんの所も、見ていてそれなりに楽しかった」
康介、落ち着きがなく、かんしゃくを起こすと立ち上がり走りだす。
晴美「こら康介！　待ちなさい！」
と笑顔で康介を追いかける。
康介は、よくわからない奇声を発しながら、喜美子の方に向かって走ってくる。
追いついた晴美、喜美子に気が付き、
晴美「あら看護婦さん、こんにちは！」
喜美子「こんにちは。元気そうなお子さんですね？」
晴美「（苦笑）まったくもう、どっちに似たんだか。落ち着きなくて困っちゃう。こら康介、ちゃんとお姉さんに挨拶しなさい」
康介「（奇声）アギャァー！」
おかしそうに笑う喜美子。
喜美子の声「（笑って）だって、あんなたいへんそうな子を、一生懸命、頑張って育てて

るんですよ。あたし、もうおかしくて」

○元の接見室・中

国枝、汗を拭き、ネクタイを緩める。

国枝「……なんていうか、凄い話だな」

喜美子「（笑顔）ねえ？　凄くないですか？　だって、全然関係ない他人の子を、一生懸命育ててるんですよ。ホントだったら、素直で可愛い男の子の両親なのに。面白過ぎますよね？」

国枝「……まあそうだな。他にもあるのか、こういう話？」

喜美子「ありますよ！　じゃあ、悠木瑠璃子さんと奈々ちゃんていう、二番目に、あたしのお気に入りの親子の話をしますね。このときは、思い切って両親の顔立ちが全然違うのにすり替えちゃったんです」

○栗原マタニティクリニック・待合室（回想）

T「三年前」

悠木瑠璃子（28）がファッション雑誌を読んでいる。瑠璃子は、目が大きく可愛らしい顔立ち。ブランド物のバッグを抱え、茶髪の髪を巻いて大きく盛っている。

そこに喜美子が来て、

喜美子「悠木瑠璃子さん」

瑠璃子「（甘い声で）はーい！」

と答え診察室に向かう。

その後姿を見る喜美子。

喜美子の声「悠木瑠璃子さんは、ブランド好きで派手で、旦那さんが社長をやってるとかで、お金の自慢ばっかりしてる感じの良くない人だったんです」

○同・診察室・外

ドアを開け瑠璃子が出てくる。

後に続いて喜美子。

瑠璃子「あーあ、なんか心配」

とお腹を撫でる。

喜美子「どうしました？　経過は順調だって、

先生が」
瑠璃子「まあ、そうなんだけどさ。うちの旦那、目が一重なのよねぇ」
喜美子「……？」
瑠璃子「しかも、少し太り気味だし。あーあ、子供のこと考えたら、もう少し、いい男と結婚すれば良かった」
喜美子「（苦笑）でも旦那さんは、会社を経営してらっしゃるんでしょう？」
瑠璃子「そうなの！　年商二十億に惹かれて結婚しちゃったけど、もっと辛抱して、お金と顔を両立してる人を探せば良かったかもって、今、少し後悔してるの。（お腹に語りかけるように）いいですかぁ？　顔は絶対パパに似ちゃダメですよ。女の子は顔が命でちゅからねえ」
　喜美子、笑顔で瑠璃子を見ている。
喜美子の声「そうなんです。悠木さんの所は女の子だってわかってたから、あたし（笑いだし）赤ちゃんをすり替えちゃったんで

す！」

○ショッピングモール（回想）

買い物客で賑わっている。

サングラスをかけた喜美子がいる。

その視線の先には、ベビーカーを押す不機嫌そうな瑠璃子の姿。

ベビーカーの中には、目が細く、下膨れの顔の、決して可愛いとはいえない赤ん坊、奈々（1）が居眠りをしている。

乱暴にベビーカーを押す瑠璃子。

それを見て喜美子が笑っている。

×　×　×　×

喜美子が軽い足取りでモールの中を歩いている。その足取りは、次第に速まり、まるでミュージカルのようなステップで人々の間を縫い歩く。

喜美子の声「あたし、もうおかしくって。だって、いくらオシャレさせても、全然奈々ちゃんに似合ってないんだもん。本当の瑠璃子

さんの娘は、大平さんていうおうちで、かえでっていう名前で幸せに暮らしてるんです。近所でも評判の可愛い子。もう四才になってるかな？」

○元の接見室・中

ぐったりと疲れ切った顔の国枝。

喜美子はニコニコとしている。

国枝「あのよう、一つだけ聞いてもいいか？」

喜美子「なんです？」

国枝「その……なんだ、すり替えた子供たちに、すまないとか申し訳ない、みたいな気持にはならないのか？」

喜美子、固い表情になり押し黙る。

国枝「いや、別に責めてるとかじゃないんだ。ただほら、これから裁判とかあるから、参考までにと思って」

喜美子「国枝さんは、あたしの味方なんですよね？」

国枝「（大きく）もちろんだとも！　俺はプロ

フェショナルだからな。どんなことがあっても依頼人の味方だ」
喜美子「（笑顔）良かった。あの、今の質問に対する答えはハッキリしてます。申し訳ないと思ってます。子供たちにも、その家族にもです。でも、それ以上に―」
と言ってからニヤリと笑い、
喜美子「面白くて仕方がないんです！」

○接見室・外
接見室から出てくる国枝。
そこに上杉がいる。
上杉「ずいぶん長かったですね？　四時間近くこもってましたよ」
国枝「何時間こもろうが、それがこちらの権利だからな」
上杉「そりゃそうですが、何を話してたんです？　藤村喜美子は犯行について話しましたか？」
国枝「だから接見室での内容を刑事に話すバ

カな弁護士はいないって」
上杉「（強く）こっちは、そっちに時間を取られて取り調べの時間が減ってるんだ！」
国枝「知らんよ、そんなの。逮捕したってことはそれなりの証拠を握ってるってことだ。だったらそれでなんとかしろよ」
上杉「映像。それにＤＮＡという完璧な証拠がありますからね」
国枝「ならいいじゃねえか。あんたらはあんたらで自分の仕事をしろ。俺は、俺の仕事をするだけだ」
　と歩き出す。
　上杉、後を追いかけ、
上杉「国枝さん。あなた藤村喜美子が子どもをすり替えた映像をじっくり見ましたか？」
　国枝、立ち止まり振り返る。
国枝「何が言いたい？」
上杉「あの女は笑っていた。子どもをすり替えたとき、あの女は笑っていたんだ！」
国枝「……」

上杉「あの女は自分のやったことを面白がっている。違いますか？」
国枝「さぁ、どうだろうな」
上杉「ああいうタイプの犯罪者は自分のやったことを本当は話したい、自慢したいはずだ。話しだしたら、きっと止まらなくなる。そうでしょう？」
上杉、挑むような目で国枝を見る。
国枝、何かを言おうと口を開きかけるが、結局何も言わずに歩きだす。

○警察署・正面入り口・外
国枝が出てくる。
争うように集まってくる記者たち。
国枝の表情に笑顔はない。
記者Ａ「国枝さん、藤村喜美子と何を話しましたか？」
国枝「話せません」
記者Ｂ「藤村喜美子とどんな話をしているんですか？　報道によれば、藤村喜美子は中

学時代に、相当ないじめを受けていたといいます。やはり、それらのいじめなどが、今回の事件に影響してると思いますか？」

国枝「知りません」

記者C「藤村喜美子の父親は、彼女が小学生の時に家を出ています。藤村喜美子はそれについてどのような話をしてますか？」

国枝「そのような話は出ておりません」

記者A「では、どのような話をしているのですか？」

国枝「(大声)うるさいな！　ここで話せることなんて無いんだよ！」

記者B「具体的な内容はいいから、どんな話題が出てるかだけでも教えてくださいよ！街では疑心暗鬼が広がっているんだ。栗原マタニティクリニックで出産経験があるというだけで噂の対象になる。藤村喜美子は、他にも子供のすり替えをやっているんですか？」

国枝「知るか！」

と怒鳴って記者たちをかき分けると、そのまま警察署を出ていく。

○記者会見場

たくさんの記者やカメラマンでごった返している。

会見席に悠木瑠璃子、瑠璃子の夫である哲也（35）、そして弁護士の佐竹伸介（65）が着席してている。

佐竹「えーそれでは、これより記者会見を開催いたします。まず悠木瑠璃子さんより重大な発表があります」

瑠璃子、メモを読みながら、

瑠璃子「えー私たち悠木哲也、瑠璃子夫婦は、四年前の８月３日に栗原マタニティクリニックにおいて女の子を出産しました。当クリニックの看護師による赤ちゃんすり替え事件の発覚を受け、念のため娘のＤＮＡ鑑定をおこなったところ、娘と私たち夫婦の間に一切の血縁関係が無いことが判明い

たしましたので、この場において発表させていただきます」
会見場全体がどよめき、猛烈な勢いでフラッシュが焚かれる。
瑠璃子、会場内を見回す。注目を浴びることが嬉しそうな様子。
瑠璃子「ですから私たち夫婦は、私たちの本当の子供を取り戻すべく、法律に基づき、訴えを起こすことにいたしました。以上、ご報告申し上げます」
記者A「すでに、相手の家族の目途はついてるんですか？」
佐竹が、マイクに向かい答えようとする。
が、その前に瑠璃子が張り切ってマイクに向かう。
瑠璃子「はい、だいたいわかっています。その家族はですね――」
慌てて佐竹がさえぎり、
佐竹「(耳元に)それはまだ確実ではないのですから、控えてください」

瑠璃子「でもぉ」
　哲也が、瑠璃子の手を押え、
哲也「（小声）瑠璃子、今はまだ発表しない方がいい。弁護士さんのアドバイスに従おう」
瑠璃子「（不服そうに）ちえ」
佐竹「（マイクに）えーこの事実は、すでに警察と栗原マタニティクリニックの方には伝えてあります。ですから近いうちに、警察の方から、なんらかの発表があるかと思います。もちろん、ご夫妻のＤＮＡは、すでに警察の方に提供してあります」
　瑠璃子、話したくてウズウズしている。
記者Ｂ「悠木瑠璃子さん、今のお気持ちをお聞かせください」
　瑠璃子、目をキラキラと輝かせ、
瑠璃子「わくわくしています。あたしの本当の娘はどんな子なんだろう？　可愛いかなあとか、何して遊ぼうかとか、夢が広がっています」
記者Ｃ「今のお子さんとは別れることになる

と思いますが、そのあたりはどう思われますか？」
瑠璃子、小首を傾げ、
瑠璃子「うーん、特になんとも思わないかな？　やっぱり本当のお父さんとお母さんと暮らした方がいいと思うし、その方が彼女も幸せだと思いますよ」
記者C「じゃあ、別れが悲しいとか、そういう気持ちにはならないんですか？」
瑠璃子「（キッパリ）ならないですね」
と言ってニッコリ笑う。
どよめく会場。
佐竹が、慌てて瑠璃子の手を押える。
佐竹「（小声）発言に気を付けて」
瑠璃子「えっ？　なにが？」
記者B「（強く）今、一緒に住んでいるお嬢さんに、なんと言って説明するつもりなんですか？」
戸惑った顔をする瑠璃子、佐竹に、
瑠璃子「（小声）なんなの？　なんで怒った感

じになってるの？」
佐竹「（小声）いいから。もう終わりましょう」
記者Ｃ「事件が発覚してすぐ、ご夫妻はＤＮＡ鑑定を受けてますよね？　何か心当たりがあったんですか？」
話そうとする瑠璃子を佐竹が押さえ、
佐竹「（大声）ええと、そろそろ記者会見を終了いたします！　どうもありがとうございました！」
と言って立ち上がる。
「ちょっと待ってよ！」「早すぎるよ」などの声が飛び交う。
記者Ｃ「（大声で）本当に、四年間も一緒に暮らしたお嬢さんと別れるのに、何も感じないんですか？」
瑠璃子「（戸惑い）何？　何なの？」
佐竹「（大声）では、記者会見を終了します！
あとですね、今日の記者会見の様子に関して、ご夫婦の顔はテレビ等で放送しないようお願いします！　新聞、雑誌なども同様

にお願いします！」
記者Ａ「ちょっと話が違ってませんか！」
記者Ｂ「顔だしＯＫってことだったでしょうよ！　どうなってんのよ？」
佐竹「事情が変わったんです！　よろしくお願いします！」
と言って瑠璃子と悠木を促す。
記者Ａ「事情って何よ！」
記者Ｃ「（怒鳴る）まだ、終わってねえだろうよ！　席につけよ！」
飛び交う怒号。
佐竹、戸惑う悠木夫婦を押し出すように会場から出ていく。

○大平家・門・外（夜）
ポストに「おおひらりょうじ　かよこかえで」とひらがなで可愛らしく家族の名前が表示してある。
門の外にマスコミが群がっている。
記者Ｅ「ホントに、この大平って人の家で間

違いないの？」
記者Ｆ「間違いない。悠木瑠璃子が出産したのと同じ日に、あの病院で女の子を産んだのはこの大平って家だけだ。それにさ――」
と言ってニヤリと笑う。
記者Ｅ「なんだよ？　気持ち悪い笑い方するなよ」
記者Ｆ「そのかえでって子は、両親に全然似てなくて、無茶苦茶可愛いらしいぞ」

○同・居間（夜）
インタホンの音が鳴り響いている。
大平かえで（4）が父、大平良治（33）にすがりついている。かえでは、目が大きく、可愛らしい顔立ち。
隣では、かえでの母、大平佳代子（29）が泣いている。
その佳代子の肩を抱く、弁護士の北村あけみ（44）。
しつこく鳴らされるインタホン。「大平さ

ん、いるんでしょう？　お話を聞かせてくださいよ！」というマスコミの声が聞こえてくる。

怯えた表情のかえで。

かえで「お父さん、怖いよ」

と良治にすがりつく。

良治「大丈夫だ。お父さんがついてる。なんにも怖いことなんかない。かえでは、なんにも心配しなくていいんだ」

ときつくかえでを抱きしめる。

佳代子、泣きはらした目で良治を見る。

良治、優しくかえでの両耳をふさぎ、

良治「（佳代子に）かえでは俺たちの子だ。誰が、なんと言おうが俺たちの子だ。俺たちは四年間、ずっとかえでと一緒にいたんだ。いいな？」

佳代子、力強く頷く。

良治「（あけみに）弁護士さん、かえでは私たちの子です。そう相手に伝えてください。裁判でもなんでも、やりたいならやればい

い。俺たちは絶対に負けないから」
あけみ、力強くうなずく。
良治、両手をかえでの耳から外し、ニコリと笑ってみせる。
インタホンが再び連打される。
かえで、今度は自身の手で両耳をきつく押える。

○警察署・接見室・中
国枝と喜美子がアクリル板をはさんで向かい合って座っている。
国枝「……まぁそういうわけで、世間は大騒ぎだよ。テレビなんかは朝から晩までどっちがどっちの子供を育てればいいのかなんて、よくわからん連中があれこれ議論してるくらいだ」
喜美子「(笑顔)で、裁判になったら、どうなりそうなんですか？」
国枝「基本的には、本当の両親の所に戻すことになる。そういう判例もあるしな。けど、

なかなか難しい問題なんだよ、これは」
喜美子「ふーん。なんか楽しみ」
国枝「……楽しいか？」
喜美子「楽しいですよ。だってよく考えてみると、奈々ちゃんはどっちの親からもいらないって言われてるってことですもんね？」
と笑顔で言う。
が、国枝が硬い表情でいることに気づき、
喜美子「……国枝さんは、あたしの味方なんですよね？」
国枝「もちろんだ」
喜美子「……」
国枝「いいか、よく聞け。今度の件であんたがすぐに再逮捕されるってことはまずない。四年も前のことだ。証拠なんて、せいぜい、あんたがその日に病院で勤務していたことがわかるくらいだ。そんなものは状況証拠でしかない」
喜美子「……」
国枝「だかな、取り調べは厳しくなるぞ」

喜美子、小さくうなずく。
国枝「検察の取り調べもだ。覚悟しておいたほうがいい」
喜美子、うなずく。
国枝「うん。それならそれでいい」
と笑顔を作る。
国枝「さぁ続きをやろう。川原祐介、なつみ夫婦とのことだ」
喜美子の表情が曇る。
国枝「どうした？　いよいよ本丸だ。川原夫妻と何があった？　なぜ、あの夫婦の子を二回もすり替えようと思った？」
喜美子「……たまたまっていうか、条件が合ったから。血液型とかの」
国枝「それだけか？　川原夫婦の件については、わからんことがいくつもある。あの夫婦は、最初の子がすり替えられたことに気づいていた。それなのに、告発することもなく、わざわざまた、同じ病院で出産をした。なぜだ？」

喜美子、不快そうな表情になる。
喜美子「あの女のやりそうなことです」
国枝「……川原なつみさんのことか？」
喜美子「そういう女なんだ、あいつは。偉そうに。最初から、あたしはあいつのことが嫌いでした」

○栗原マタニティクリニック・待合室（回想）
T「三年前」
川原なつみ（30）がいる。
なつみは背が高く、髪の長い知的な雰囲気のある女性。
そこに喜美子が来くる。
喜美子「川原さん」
なつみ「はい」
と立ち上がり、待合室を出る。

○同・診察室・中（回想）
栗原と話すなつみ。
その背後に喜美子がいる。

栗原「無痛分娩をご希望なんですね？」
なつみ「はい。欧米では無痛分娩が主流と聞きますし、それで問題ないのなら、無理に自然分娩にこだわることはないかと思いまして」
栗原「うん、わかりました。ではそうしましょう。患者さんの希望が第一ですからね」
なつみ「ありがとうございます」
喜美子、そんなやりとりを無表情で背後から眺めている。

○元の接見室・中
喜美子「嫌いだった。美人で頭が良くて、二言目には、欧米の話をするあの女が、あたしはどうしても好きになれなかった」
国枝「……それで子どもをすり替えてやろうと思ったんだな？」
喜美子「（うなずく）……」
国枝「（つぶやく）なるほどね……」
喜美子「そのころのあたしは、子どもをすり

替えることに、もうなんの抵抗もありませんでした。ただ、もちろんムリにやるつもりはなかった。同じ日にちゃんと条件の合う子が産まれたらやる。そうでなかったらやらない」

国枝「で、条件の合う子がいたんだな？」

喜美子「はい。血液型もバッチリ。わざわざＤＮＡ鑑定をしないかぎり絶対にばれないと思えるほどいい条件でした」

○新生児室・中（深夜）（回想）

「かわはら」と名札のついたベッドで赤ん坊が寝ている。

それを笑顔で見下ろす喜美子。

喜美子、軽く赤ん坊の鼻をつまみ、

喜美子「（おどけた声音で）オーマイゴッド」

赤ん坊、不思議そうに喜美子を見ている。

喜美子の声「そして、ちょくちょくあの女と子どもの様子を見にいってたんです」

○ショッピングモール（回想）
ベビーカーを押すなつみ。ベビーカーの中には、長男の大地（1）がいる。
そこにやってくる喜美子。
喜美子「（笑顔）あら、川原さん、こんにちは」
なつみ「ああ、どうも……看護婦さんでしたよね？」
喜美子「（ニッコリ）はい。その後の調子はいかがです？」
なつみ「ええ……まあ、順調です」
と少し言い淀む。
喜美子、大げさに心配そうな顔になり、
喜美子「どうかしましたか？　何か気になることでもあります？」
なつみ「いえ、別にたいしたことじゃないんですけど……」
喜美子「何か心配なことがあるなら相談に乗りますよ。もちろん、お体やお子さんのことしかあたしには無理ですけど」
なつみ「いや、別に大丈夫です。あの……

仕事のこととか、そっち方に気になること
があって」
喜美子「(笑って)ああ、そうですか。じゃあ、
あたしじゃダメだ」
としゃがんで大地の顔を覗きこむ。
喜美子「こんにちは。(なつみに)大地くんで
したっけ?」
なつみ「そうです。よく覚えていてくれまし
たね」
喜美子「ええ。あたし、子供が好きなんです。
だから、今の仕事、すごく楽しくて」
なつみ「あの……失礼ですけど、看護婦さん
は、結婚……?」
喜美子「独身です。それに、たとえ結婚した
としても、あたしは赤ちゃんが産めないん
です。まぁいろいろありまして」
なつみ「(戸惑い)あ……あの、ごめんなさ
い。変なこと聞いちゃって」
喜美子「いいんです。でも、あたし子供が大
好きなんで、これからもまた、街で会った

ら声を掛けていいですか？」
なつみ「……はい」
×　×　×　×
モール一階通路をベビーカーを押して歩くなつみ。
吹き抜けの二階から喜美子が、それを見下ろしている。残酷な笑顔。
喜美子「(呟く)誰も、なーんにも気付かない。親の愛情なんて大嘘」
と吐き捨てる。

○元の接見室・中
喜美子の口元に笑顔が浮かんでいる。
国枝「つまり、うまくいったということか。まぁうまくいくって言うのも変な言い方だけど」
喜美子「はい。ざまあみろって思ってました。偉そうにしてるくせに、ホントは何にもわかってないって」
国枝「でも、川原さんは疑いを抱いていた」

喜美子「わからない。ただ、やりすぎたのかなって思う。とにかく楽しくって何度もあの女に会いに行ってたから」

○スーパーマーケット・店内（回想）

なつみと大地がいる。二才を過ぎた大地は、よちよち歩きでなつみについて歩く。

そこに来る喜美子。

喜美子「こんにちは」

なつみ「……ああ、どうも」

喜美子、前かがみになり、大地に、

喜美子「こんにちは、大地くん。凄いね、もう、こんなに歩くようになったんだ？」

大地、不思議そうな顔で喜美子を見る。

喜美子「（なつみに）もう、二才半くらいですよね？　ずいぶん大きくなって」

なつみ「……ええ」

喜美子「大地くん、こんにちは。今日はママとお買い物？」

大地、可愛らしく首をかしげる。

喜美子「大地くんはお母さん似かな？　それともお父さん似？」
と大地となつみの顔を見較べる。
喜美子「目がお母さんにそーっくり」
なつみ「（強く）そうでしょうか？」
突然の強い言葉に驚いて、喜美子はなつみを見上げる。
喜美子「ど、どうしました？」
なつみ「あたしの目と大地の目は似ているでしょうか？」
喜美子「あ……あの、似ていると思います。ほら、ちょっと大きい感じとかが、そ、そっくりです」
なつみ「本当にそう思っていますか？」
喜美子「あの……どういうことでしょう？」
なつみ「あの……看護婦さんは私たち親子以外にも、こんな風に以前の患者に声を掛けたりしているんですか？」
喜美子「（頷いて）え……ええ」
なつみ「栗原マタニティクリニックの年間分

娩数は八百前後。私、調べたんです。看護婦さんは、それだけの数の親子を全部覚えているんですか？」
喜美子「いや……全部ではありません。全員を覚えているわけではないです」
なつみ「でも、私たち親子のことは覚えている」
喜美子「ええ、まぁ」
なつみ「なぜです？」
喜美子「なぜって聞かれても……」
なみつ「しかもよく会う。不思議だと思いません？」
喜美子「いや、それは偶然というか……」
なつみ「偶然、たまたまが何度も重なったってことですか？」
喜美子「いや、そんな風に理屈でこられると困っちゃうな。本当に偶然です」
なつみ、じっと喜美子を見る。
喜美子「あの……あたしそろそろ失礼します」
と立ち上がり、歩き出す。

なつみ「（その背中に）あの」
喜美子、振り返りなつみを見る。
なつみ「本当に大地のことを可愛いと思ってます？」
喜美子「思ってます。あたし、大地くんのことが大好きです」
と言って逃げるように歩き出す。
なつみも反対方向に歩き出す。
が、大地がついてこない。
なつみ「（冷たい声で）大地、おいてくよ」
喜美子、その声に思わず振り向く。
なつみと視線が合う。
喜美子、逃げるように走り出す。
自動ドアを出て、後ろを振り返る。
なつみがまだ喜美子を見ている。
喜美子、再び走り出す。今度は振り返ることなくひたすら走り続ける。

○元の接見室・中
喜美子、悔しそうな顔をしている。

国枝「なるほど。なんとなく嫌な予感はあったってことか」

喜美子「……でも、気のせいだったと思うようになりました。だって、二人目を妊娠して、あの女は、またウチのクリニックに来たんだから」

○栗原マタニティクリニック・待合室（回想）

T六か月前

少しお腹の膨らんだなつみがいる。

そこに喜美子がやってくる。

喜美子「川原さん」

なつみ「はい」

と笑顔で立ちあがり診察室に向かう。

その後姿を喜美子がじっと見ている。

喜美子の声「その頃にはもう、川原なつみの二人の子どもが、二人とも他人の子どもだったら最高に楽しい。私はその考えに取りつかれていました」

○新生児室・中（回想）（深夜）
喜美子が「かわはら」の札がかかったベッドを楽しそうに覗きこんでいる。
喜美子の声「神様からゴーサインが出たんだと思いました。だって、ホントにビックリするほど条件に合った子が同じ日に産まれたんですから」
喜美子、赤ん坊の産着や毛布などを整えてから、天井に備え付けられている監視カメラをじっと見つめる。

○元の接見室・中
喜美子が悔しそうな表情。
喜美子「失敗した。あの女許せない。絶対に仕返ししてやるんだ。先生、あたし、いつここから出られるんですか？」
と挑むように尋ねる。
国枝は、驚愕の表情を浮かべ返事ができない。

○接見室・外

国枝が出てくる。

その姿を上杉が恨めしそうに見ている。

国枝「おい、あんた」

上杉「なんです？」

国枝「藤村喜美子は無罪を勝ち取るため、心神喪失または耗弱の演技をしている。あんた、そう思っているだろう？」

上杉「思ってますよ」

国枝「違うよ。あの女は……あの女はホントにいかれてるよ」

○警察署・外

国枝がマスコミにもみくちゃにされながら歩いている。

記者Ａ「国枝さん、藤村喜美子は何と言っているんですか！」

記者Ｂ「悠木奈々ちゃんの件について、藤村喜美子は何か言っていましたか？」

国枝、いっさい回答せず、厳しい表情の

ままマスコミをかき分け進んでいく。

○川沿いの道

川幅が広く、ゆったりと水が流れている。

疲れ切った表情の国枝、ぼんやりと川を眺めている。

ポケットから携帯電話を取り出し、どこかへと電話をかける。

出たのは娘の裕子（35）。

裕子の声「（低いトーンで）もしもし」

国枝「ああ俺だ。元気にしてるか？」

裕子の声「……うん。どうしたの？」

国枝「いや、別に。たまには声でも聞いておこうかと思ってな」

裕子の声「……そう」

国枝「（おどけて）なんだよ、久しぶりの父親からの電話だってのに、ずいぶん愛想ねえな」

裕子の声「……」

国枝「……いや、であのなあ」

裕子の声「（かぶせて）あの、ちょっと用事があるから悪いけど」
国枝「あ、そうか。じゃあ――」
国枝が話し終わらぬうちに電話が切れる。ため息をつく国枝。携帯をポケットにしまう。

○川原家のあるマンション・前
瀟洒な外観のマンション。
国枝がやってくる。ハンカチで汗を拭き、マンションを見上げる。

○同・エントランス・中
国枝がインタホンを押す。
なつみの声「はい。どちら様ですか？」
国枝「あの私ねえ、藤村喜美子の弁護士をやっとります国枝と申します。少しお話を聞かせてもらえないかと思いましてね」
なつみの声「（かぶせて）お断りします。お引き取りください」

インタホンが切れる。
国枝「参ったなあ」
と再びインタホンを押す。
なつみの声「（強く）お帰りください」
国枝「そう言わないで。どうしても川原さんに会って話が聞きたいんです。少しでいいから会ってくれませんか」
返事がない。
国枝、ため息と共に頭をかく。

○川原家・リビング
リビングに戻ってくるなつみ。カーテンを開け、外の様子を確認する。
通りから国枝がこちらをうかがっていた。
国枝と目が合ってしまう。国枝は、大きく手を振り、ジェスチャーでエントランスを示し、拝む仕草をする。
ため息をつくなつみ。
国枝がエントランスに向って走り出し、すぐにインタホンが再び鳴る。

○川原家・リビング
国枝がリビングのソファに座り、物珍しそうに室内を見回す。
なつみ「何か飲みますか？」
国枝「ええと、できれば冷たい物を」
隣の和室で大地が積み木遊びをしている。
なつみが麦茶を運んでくる。
国枝「あの（大地を見て）大丈夫ですかね？もちろん言葉は選ぶし、（小声で）なるべく小さな声で話しますがね」
なつみ、無言で和室を向かい、
国枝「大地、そこで静かに遊んでいなさい」と冷たく言い放って引き戸をピシャリと閉める。
国枝、その冷たい言い方に少し驚く。
なつみ、国枝の正面に座る。
国枝、名刺を取り出し、なつみに渡す。
国枝「すみませんね。わざわざ時間をとっていただいて。私、藤村喜美子の弁護を担当しております――」

なつみ「挨拶は不要ですから、聞きたいこと
があるなら、それを言ってください」
国枝、あわてて手帳を取り出し、
国枝「失礼。それじゃあ遠慮なく。えっと旦
那さんは会社に行っておられるんですね？」
なつみ「その辺のことは、もうご存じなんで
しょう？」
国枝「ええ、まあ。ただ一応念の為と思った
んですが」
なつみ「……」
国枝「失礼。ええと」
と手帳を見る。
なつみ「あの女」
国枝、顔を上げ、
国枝「はい？」
なつみ「あの女は、反省しているようですか？」
国枝「(笑って)藤村喜美子ですね？　そりゃ、
もう。毎日しょんぼりしてますよ」
なつみ「嘘です。あの女が反省なんてするわ
けがありません！」

国枝、驚いてなつみの顔を見る。
国枝「どうしてそう思われます？」
なつみ「私にはわかります。あの女は面白がってた。子どもをすり替えるというのは、あの女の遊びだったんです」
国枝「いや……それは」
なつみ「間違いあまりせん。他にどんな理由があります？　そしてあの女は他にもやっています。昨日の記者会見をご覧になったでしょう？」
国枝「いや、あれは藤村喜美子さんの犯行と決まったわけじゃない」
なみつ、薄く笑い国枝をじっと見る。
国枝、少したじろぐ。
国枝「いや……あの、私がここに来たのは、あなたと藤村喜美子の関係が知りたくてやってきたんですよ」
なつみ「何もありません。単なる看護師と患者の関係です。あるいは被害者と加害者の関係とか」

国枝「いや、まぁそうなんですがね。私はどうもよくわからない。つまり―」
なつみ「(かぶせて)あの女は楽しんでた。血の繋がらない子どもを必死に育ててるのを見て笑ってたんです。私にはわかります」
国枝「……」
なつみ「ただ、私の場合は少し違うかもしれません。あの女は私のことを嫌ってましたから」
国枝「そう思う根拠は？」
なつみ「(笑って)そんなのわかります。よくあることですから」
考え込む国枝。
国枝「あなたはお子さんのＤＮＡ鑑定をした。まず、なぜそうしようと思ったのかを知りたい。そして、あなたは藤村喜美子を疑った。なぜです？　それもよくわからない。けど、いちばんわからないのは、なぜわざわざもう一度栗原マタニティクリニックで出産しようと思ったのかってことです。た

だ藤村喜美子を告発すればよかったじゃありませんか？」
なつみ「単なるミスで片付けられたくなかったんです。あの女は私を嫌っている。だから、私がもう一度あのクリニックで出産をすれば、あの女はきっとまた産まれてきた子をすり替えるはずと思いました」
国枝「……何があったんです？　教えてください」
なつみ、ふぅと大きく息を吐きだし、
なつみ「わかりました。すべてを話します。私だって最初からあの女を疑っていたわけではありません。最初は自分自身を責めていました。どうしてもあの子に対する違和感を拭えなくて……」

○川原家・リビング（回想）
T「三年前」
川原佑介（32）がベビーベッドにいる大地を楽しそうにあやしている。

離れてなつみがぼんやりとした表情。
佑介、なつみを見て、
佑介「僕が大地を見ているから、君は休むといい。疲れているんだよ、きっと」
なつみ、無表情で立ち上がり、リビングを出ていく。
佑介、その後姿を疲れた表情で見送る。
が、気を取り直して、再び大地をあやし始める。

○同・夫婦の寝室（夜）（回想）
ベッドに並んで座るなつみと佑介。
佑介「いいかげんにしないか。そんなことがあるわけないじゃないか」
となつみの手を握ろうとする。
が、なつみがそれを振り払い、
なつみ「やっぱり信じてくれないんだ」

○元の川原家・リビング
なつみ「誰もあたしの言うことを信じてくれ

なかった」
国枝「それがあなたの言う違和感ってやつですね？」
なつみ「（うなずいて）あたしは大地を可愛いと思えませんでした。というより自分の子だとどうしても思えなかったんです」
国枝「そう感じるハッキリとした根拠があったんですか？」
　なつみ、首を振る。
なつみ「だから、みんなが気のせいだって。あたしもそう思おうと努力しました。だって間違いの入る余地なんて無いのは、あたしもわかってましたから」
国枝「（頷く）……」
なつみ「でも、どうしても（閉まった引き戸を見て）あの子に愛情を感じることはできなかった」
国枝「……」
なつみ「それからしばらくして、あの女がときどきあたしの前に現れるようになったん

です」
国枝「藤村喜美子ですね？」
なつみ「(頷いて)おかしいと思ったんですよ。あたしのことを嫌ってるはずなのに」
国枝、苦笑いを浮かべる。
なつみ「いつも笑っていた。あの女は、いつもイヤな笑顔を浮かべて私の前に現れたんです」
国枝「……」
なつみ「何度目かの時に確信しました。あの女が何かをした。あの女が私の子に何かしたんだって」

○スーパーマーケット・中（回想）
（※喜美子の回想に出てきたのと同じ場面）
かがんだ喜美子が大地に声をかける。
喜美子「大地くんはお母さん似かな？　それともお父さん似？」
となつみの顔と比べ、
喜美子「お母さんにそーっくり」

喜美子の笑顔はとてつもなく不気味に見
える。

○川原家・リビング（夜）（回想）
なつみがＤＮＡ鑑定の報告書を佑介に見
せている。
佑介の手が震えている。
佑介「君は、本当にＤＮＡ鑑定を受けたのか？」
佑介、鑑定書を読みこむ。次第に手の震
えが大きくなっていく。
佑介「バカな！　どうして……どうしてこん
な結果が出るんだ。大地は君の子ですらな
い。どういうことだ？」
なつみの表情は安らかで微笑んでいる。
なつみ「でも、これが事実。もし疑うなら、
もう一度本格的な鑑定を受けましょうよ」
佑介「ああ……そうだな、そうしよう。しか
し、どうしてこんなことが……。出産には
僕も立ち会っていたのに！」
と頭をかきむしる。

なつみは、そんな佑介をゆったりとした
笑顔で見つめている。
なつみの声「私はもう一人子どもを産むこと
にしました。もちろん、あのクリニックで
です。そして、それとは別に院長先生と会
うことにしました」

○喫茶店・中
テーブルの一方に栗原医師。その反対側
になつみと祐介が座っている。
栗原はＤＮＡ鑑定の結果を見ながら、
栗原「バカな……そんな間違いが起きるわけ
がない」
なつみ「だから間違いではないんです。意図
的な犯罪行為です。あの藤村喜美子という
看護師が、わざと子どもをすり替えている
んです」
栗原「信じられん」
なつみ「でも、病院の過失による管理ミスと
言われるより、一人の悪質な看護師による

犯罪となったほうが病院としてもいいん
じゃありませんか？」
栗原「そりゃあまあそうだが……それにして
も信じられん。まさか、彼女が……」
なつみ「そのまさかが起きてるんです。あの
女は必ずまたやります。毎日、監視カメラ
をチェックしてください」
栗原「しかし……」
なつみ「事件や事故がない限り監視カメラの
映像を確認することなんてない。あの女は
安心しきってます。だから、毎日確認して
ください」
栗原「……わかった」
なつみ「とくにあたしの子が産まれたら注意
してください。あの女は絶対にやります」
栗原「どうして、そんなに確信があるんです？」
なつみ「女の勘です」
と答えてニコリと笑う。

○記者会見場

なつみ、祐介、そして男性弁護士が会見場前方のテーブルに着席している。
集まったたくさんの記者たち。
少し頬を紅潮させ、なつみが話を続けている。
なつみ「──ですから、私たちの長男に関しましては、今まで通り私たちの子として育てていくことにしました」
記者A「相手のご夫婦は納得しているんですか？」
なつみ「（ニッコリ）はい」
と答えて会場を見渡す。
なつみ「私たちは、もうすでにたくさんの時間を息子とともに過ごしてまいりました。それは血の繋がりと言われるものよりはるかに太い絆だと私たちは考えています」
会場後方に国枝の姿がある。
険しい表情で国枝は、話しを続けるなつみをじっと見ている。
なつみ「これが私たちの出した結論です。藤

村喜美子という人物が何を考えこんなことをしたのか、私たちにはわからないし、またわかりたいとも思いません。ただ、彼女のした行為は、結果として私たち家族の絆を深めるのに役立ってくれました。私たちはこれまでも、そしてこれからも素晴らしい家族であり続けるでしょう」

○接見室・中

アクリル板を挟んで国枝と喜美子がいる。

喜美子「ふん、そんなのウソに決まってる。あの女は大地クンのことを嫌っていた。あたしへの当てつけに決まってます」

国枝「……」

喜美子「可哀そうな大地クン。あんなのが母親だなんて」

国枝は言葉が出ない。ただ黙って喜美子の顔をじっと見つめる。

○藤村家・居間（夜）

座卓に一方に国枝、その反対側に富子が座っている。

富子「……わたしがですか？」

国枝「そう。できる？」

富子「そりゃあした方がいいんだったらしますけど」

国枝「うん。した方がいい。そりゃあ世間の心証が裁判に影響するなんてことはない。けどね、裁判になったら、お母さんには証人として出廷してもらうから。そこで約束するんだ。娘の更生に責任を持つって。その時、あんたがこれからやることが説得力になるから」

富子「……」

納得いかない表情の富子。

国枝は、そんな富子をじっと見つめる。

○記者会見場

ぎっしりと記者たちが集まっている。

前方のテーブルに国枝と富子が並んで着

席している。

国枝「えーでは、これより藤村喜美子の母親である藤村富子さんによる会見を行います。これは、世間の皆さまに直接お詫びをしたいという本人からの強い要望によって行われるものであります。（富子に）どうぞ」

富子、用意してきたメモを広げる。

富子「本日は、たくさんの方にお集まりいただき、本当にありがとうございます。わたくし藤村富子は、娘、喜美子の犯した罪をお詫びするために、弁護士の国枝先生に無理を言って、この会見を開くことにいたしました」

とここまで言って、チラリと国枝の表情をうかがう。

が、国枝は知らぬ顔をしている。

富子「――いくら私がお詫びをしても、それで許されるわけがないのは十分承知しております。それでも私は皆さまに謝りたいのです。なぜなら、私にも責任があるからです。

藤村喜美子を産み、育てた母親としての責任があるからです」

富子、立ち上がる。そして、テーブルを回り込んで、記者たちの前に立つ。

富子「申し訳ありませんでした」

と床にひざを着け、土下座する。

富子「(土下座したまま)申し訳ありませんでした。どうかお許しください！」

カメラマンたちが、争うように写真を撮り始める。

「押すな！」「どけ！」などの怒号が飛び交う。

その間も、富子はひたすら頭を床につけ、土下座を続ける。

背後からそれを見下ろす国枝。疲れ切った表情で固く目を閉じる。

○警察署・接見室・中

喜美子と国枝がいる。

喜美子、茫然とした表情。

喜美子「お母さんが……どうして？」
国枝「あんたのためだ。あんたのために、お母さんが代わりに謝ったんだ」
喜美子「どうして？　どうしてお母さんが謝るの？　あの人は関係ないでしょう。どうして止めてくれなかったの？」
国枝「しょうがねえだろう。お母さんの希望なんだから」
喜美子「でも……あの人は関係ない。あの人は、何を話したの？」
国枝「話したっていうか、謝ったんだよ。こうやって（とカウンターに手をつき）、まあ土下座って奴だ。あんたのお母さんは土下座をしたんだよ」
喜美子、ガバッと立ち上がり、仕切りのアクリル板を叩く、
喜美子「（大声）ふざけるな！　どうして土下座なんかさせる！　母さんは関係ないだろ！」
喜美子の突然の変貌に、国枝は驚愕の表

情を浮かべる。
国枝「(大きく)あ、あんたが反省しないから、お母さんが代わりに謝ったんだよ。あんたのためにお母さんが犠牲になったんだ！」
喜美子「ふざけるな！　お前だな！　お前がやらせたんだ！」
仕切りを叩く喜美子。その形相は、まるで別人のよう。
喜美子「ふざけるな！　お前は弁護士だろ！弁護士は弁護してればいいんだ！」
国枝「するさ！　今の自分をよく見ろ！　その調子だ！　間違いなく精神鑑定だよ。うまくいきゃあ不起訴だ！」
喜美子「覚えてろ！　お前にも仕返ししてやるぞ。必ずだ。覚悟しておけ！」
とアクリル板を激しく何度も叩く。
国枝、恐怖に引きつった表情で椅子から立ち上がる。足元がふらつく。
そこに、上杉が飛び込んでくる。
上杉「どうしました？」

と国枝を抱きかかえる。
上杉「(大声)誰か！　藤村喜美子を連れていけ！　誰か！」
喜美子の側にも警官が飛び込んできて、喜美子を取り押さえる。
激しく抵抗する喜美子。
喜美子「(国枝に)覚えておけ！　お前も地獄行きだ！　お前も、あたしと一緒に地獄に連れてってやる！」
国枝、恐怖に引きつった表情で暴れる喜美子を見る。

○同・接見室・外
上杉が国枝を支えて出てくる。
上杉「大丈夫ですか？」
国枝「(つぶやく)どいつもこいつも、みんなバケモノだよ」
上杉「どういうことです？」
国枝、無言で上杉を振りほどくと、そのまま警察署を出ていく。

○住宅街の中にある小さな公園

国枝がぐったりとベンチに座っている。

そして、携帯電話を取り出しかける。

裕子の声「……はい」

国枝「もしもし、裕子か？」

裕子の声「……どうしたの？」

国枝「(苦笑) どうもしやしないよ。ただ電話をしてみたくなったんだ。どうしてる、元気にしてるか？」

裕子の声「(素っ気なく)うん、元気だよ？　で、なんの用？」

国枝「別に、用ってほどでもないが、今度、家に遊びにこないか？　子供連れて。ほら、なんていったっけ？　名前忘れちまったな、俺の孫、男の子だ」

裕子の声「(ため息) 翔太。関心ないのはわかるけど、孫の名前くらい覚えてよね」

国枝「悪かった。で、来てくれるか？　翔太を連れて、遊びに来てくれ」

裕子の声「……行かない」

国枝「どうして？」
裕子の声「（大きく）行かないったら行かない！　行きたくないの！　お父さんのこと、毎日テレビで見てるよ。見たくないのに。毎日テレビに出てくるんだもん、どうしたって見ちゃうよ！　お父さんてさあ、全然変わってないよね。調子に乗って偉そうに喋って。そういうとこが、あたしたち家族に、どれだけ迷惑かけたか全然考えたことないでしょう！」
国枝「……悪かった。反省してる」
裕子の声「……（驚いた声で）どうしたの？　お父さんが反省？　何かあったの？」
国枝「（苦笑）たいしたことじゃない。今、扱ってる事件なら、もうすぐ終わる。だから、それが済んで、静かになったら、うちに遊びに来てくれ。お前と翔太の顔が見たくなったんだ。（おどけて）俺だって、人の親だ。子や孫の顔を見たくなることだってあるだろう」

裕子の声「……」
国枝「なあ頼むよ。会いにきてくれ。お前や孫の顔が見たいんだ」
裕子の声「……わかった。しばらくして、お父さんの方が落ち着いたら、翔太を連れて遊びに行くよ」
国枝「そうか……ありがとう」
裕子の声「（笑って）ホントにどうしたの？ありがとうなんて、あたし、お父さんに初めて言われたような気がするけど」
国枝「（笑って）そうか、言ったこと無かったか。ありがとうな。これからは、何度でも言ってやるよ」
と言いながら涙がこみ上げてくる。
国枝「（慌てて）じゃあな。約束したぞ」
と電話を切る。
国枝、うつむいて泣きだす。涙は、後から後から出てくる。ほとんど号泣に近い状態で泣き続ける。

○精神病院・外

多くの緑に囲まれた落ち着いた雰囲気の精神病院。

○同・中庭

ベンチが点在している。

その一つに、喜美子と富子が並んで座っている。

少し離れたベンチに国枝がいて、そんな二人の様子を見守っている。

喜美子が富子の肩にもたれて静かに泣いている。

富子、喜美子の肩を抱き、やはり静かに涙を流す。そして何事かを喜美子に囁く。

頷く喜美子。

国枝、そんな二人の様子をじっと見続けている。

○同・正門付近

門を通り、国枝と富子が出てくる。

国枝「まあ、娘さんも、少しずつ落ち着いてきてるみたいですな」
富子、ため息をついて、
富子「……はい。けど、それを喜んでいいのかどうか。これから先のことを考えると、どうしていいのやら」
国枝「まぁ、これから慰謝料やらなんやら、いろいろ面倒なことがあるだろうしな」
富子、不安そうな表情。
富子「……あの先生」
国枝、笑い出し、
国枝「大丈夫。心配いらない。ちゃんと最後まで面倒みるよ。費用もまけとく。大ディスカウントだ」
富子「ありがとうございます」
国枝「だからまぁ、ぼちぼちいきましょうや。少しずつ、お互いにさ」
富子「お互いに……ですか？」
国枝、苦笑いして、
国枝「うん、そう。つまり、オレもあんたも

娘さんも、少しずつぼちぼちやっていきま
しょうやってこと」
富子「……はあ」
と意味がわからないというように首をか
しげる。
国枝「ぼちぼちいきましょう、ぼちぼち」
と歩く。
それに続く富子。
二人の行く手には、長く伸びる一本道が、
どこまでも続いている。

了